



## 第 47 回 「野蛮な大学論」の言葉

酒井敏著「野蛮な大学論」（光文社新書、2021 年 10 月）は大学およびその教員が目指すべき方向について、大学教員である著者が論評した書物です。私もかつて大学教員であったことから、この著書の内容に共感しつつ読みました。本書では特に科学、研究、教養、そして大学について論評されています。その中で私の心に残った忘れえぬ言葉は「教養」に関する記載です。

著者はまず問題解決のヒントや指針となる引き出しのような知識や経験が「教養」であると説明しています。なお、「物知り」であることを教養と捉えがちですがその博識はさほど役には立たず、大学でそんな人間を育てるのは無駄であると指摘しています。教養とは人を喜ばせる雑学ではなく、すぐには役に立たない「ガラクタ」のようなものだそうです。その点では、「面白い」と思って始める研究の成果と同じですが、近年の日本社会にはそのような目的のはっきりしない研究を嫌悪する風潮があると指摘しています。

しかし著者はこれまでの研究の他には使うことはないと思っていたガラクタでも、捨てずにいたものが思いがけず次の研究の役に立つという経験を積んだそうです。真の教養はいざというときに自分を助けてくれる武器になることの好例ですね。目的がさっぱりわからないガラクタのほうが、汎用性が高いのですが、教養とはそのような柔軟性を備えた汎用性の高いガラクタのようなものであり、そんなことを知って何の意味があるのかわからない知識をたくさん持っている人こそ「教養のある人」なのだそうです。もっともガラクタをたくさん持っているだけでは無意味であり、別の目的に使うためには一見すると役に立たないものに意味を見出すセンスが必要です。すなわち教養のある人とはどこに価値があるかわからない膨大な知識を組み合わせ、新しい価値は意味を見出すことができる人だそうです。

著者は昔の論文のなかに「なぜここでこんなことを考えたんだ？」というものを見つけることがあるそうですが、そこで「よそからガラクタを見つけてきて使ったんだな」と腑に落ちるそうです。私にも同じような経験があります。たとえば一つの論文をざっと読み、次に斜に構えてひねくれた問題意識を持ちながら批判的に深読みすると、その背景となる当時の研究分野がもつ不完全性が見つかることがあります。しかしその不完全性を解決する努力は多数の例題演習的な論文を書くという効率本位の研究とは真逆なので、ほとんどの人は「知らんぷり」して通り過ぎていくのです。こうしてその研究分野では「そんな不完全性は存在しない」という通説がまかりとおってしまうのです。これでは科学は進歩しません。その不完全性に注目することにより、そこに新しい研究テーマが見つかるのですが。しかし科学の進歩のための小さな針孔を開けるには特殊な「道具」が必要です。それはこれまで知らんぷりしていた研究者が持っていない新しいものです。そこで上記のガラクタが役に立つのです。

私事で恐縮ですが、私のドレスト光子の研究は 40 年前に、「光の波長より寸法の小さな電磁場を生成する」という意気込みから始めたもので、当時は役に立たない「面白い」研究でしたが、それは上記のような「針孔」を見つけたからです。開始当初はドレスト光子を発生するための道具は当然ながら皆無でした。そこで

手持ちのガラクタを組み合わせながら細々と研究を進め、それが現在につながる発展をもたらしました。最近では基礎となる理論の研究も大きく発展しています。これらはまさに当時のガラクタの賜物です。

さて、研究とはあまり関係ありませんが、本稿の最後に私のガラクタ集めをご披露しましょう。私は以前から暇つぶしのために建物模型を作ってきました。基本的な寸法は1/150 尺度ですが、建物によってはこの尺度とは限りません。日頃目にする建物中で、これはいいな！と思ったものの模型を作ります。これまでに名もない建物の模型を多数作りましたが、時にはよく知られた歴史的建物も作ってみました。たとえば「東京都庭園美術館」（東京都港区）、「松下村塾」（山口県萩市）、「法隆寺」（奈良県生駒郡）などです（僭越ながら出来上がり写真を本稿末尾に掲載します）。現地を繰り返し訪れ、建物をいろいろな角度から観察して設計図を作ります。保存されている設計図面を見つけ出し、それをもとに作ることもあります。さて、作る時に問題になるのは模型用の素材（紙、木材など）の調達です。普通の素材店ではこれはないものが見つかありません。そこで以前はそれまで蓄えてきたガラクタが重宝しました。模型作りの経験が増えると、より適した素材を見つけるコツが身につき、その入手経路の知識も増えてきました。今ではこれらの素材の余り物も将来作る模型用的高级ガラクタとして手元に蓄えています（その代わりゴミ屋敷化も進んできているのが悩みの種ですが）。本書が取り上げている「研究」の活動に関しても、ガラクタを組み合わせ始められれば、それだけでも第一の勝利ですが、さらに進むとガラクタ以上のものが必要になります。それを見つければ、さらに大きな勝利を手にすることができるのでしょね。

最後に愚痴をこぼしましょう。素材とともに重要なのは模型を作る道具（細字ペン、高精度の定規、切れ味のいいカッターナイフやハサミ、精密ピンセット、部品固定用の接着剤など）です。これらは高価なので、暇つぶしのための趣味とは言ってられないような経済的状況へと入り込んでしまいます。たとえばごく最近作った「法隆寺（中門、金堂、五重塔）」などはその代表例です。そうそう、出来上がり作品を収納する適当な大きさの透明ケースも街中では見当たらないため、これらも自作せざるを得ません。最近では模型本体よりも作成のための道具、収納ケースを調達する方に多くの時間と労力を費やさざるを得なくなっています。



東京都庭園美術館



松下村塾



法隆寺